『子どもへの愛』の社会学（2）

――子どもへの愛の成立――

山田昌弘

4、子どもへの愛の成立

フィリイプ・アリエスの『子供の誕生』（1960年出版）は、近代家族、教育を論じる際に不可欠の著作である。この本は、従来の家族論、教育論の常識をくつがえしてしまった。彼は、絵画から小説に至る多様な資料を駆使し、西ヨーロッパ中世から近代に至る、家族や子供に対する民衆の感覚、見方、特に情緒的態度を明らかにした。「中世には子どもという概念が存在しなかった」という大胆なテーゼのために批判も多いが、彼の理論はほぼ正しいという評価がなされている。（宮坂靖子「Aries Ph. の近代家族論の検討」家族研究年報11）まず、アリエスの成果を用い、近代ヨーロッパ社会における、「子どもへの愛情」の成立過程を簡単に述べてみよう。

『子供の誕生』は、先ほど述べた有名なテーゼで始まる。もちろん、ヨーロッパ中世社会に「子供」がいなかったわけではない。我々の社会（すなわち近代社会）で

思い浮ぶ子どものイメージを、中世社会においては見出すことができないことを意味している。我々の社会での子どもに相当する年齢の人間は、二つに区別されて認識されていた。一つは、乳幼児であり、いつ死んでもおかしくない不安定な存在と認識されていた。少し大きくなり、我々の社会で少年・少女と呼ばれる年齢に達すると、大人と同様に扱われる。いわば、「小さな大人」と認識される。乳幼児期の子どもに対しては、かわいがりや戯れの情緒規則が割り当てられていた。この感覚は、我々の社会で子どもをかわいがるものとは異質だ。「ちょうど動物と戯れるように、…人びとは子どもと戯れたのであった」。前近代社会の例に漏れず、乳幼児をかわいがるのは、親に限定されない（前号参照）。特に女性集団が、子どもたちをかわいがっていた。乳幼児死亡率が高い時代なので、「子どもは一種の匿名の状態からぬけ出ることはなかった」。

子どもが危険な時期をのりこえると、普通子どもは家族を出、「小さな大人」として扱われる。近代社会では、家族を離れた大人同士の関係というと、冷たい、非情緒的な関係を思い浮べがちである。しかし、当時は、「感情の交流や社会的なコミュニケーションは家族の外にあって、隣人、友人、親方や奉公人、子どもと老人、女性や男性から構成されているきわめて濃密かつ厚い環境によって保証されていたのであり、そこで愛情関係をもつことにはたいした拘束もなかったのである」というような情緒関係が家族の外でもとり結ばれていた。この状況を専門用語で「ソシアビリテ（社交性）」と呼んでいる。つまり、子どもは10歳前後で、ソシアビリテの中に放り出され、家族外の人々と情緒関係を取り結んでいった。

家族の近代化を要約すれば、家族内に情緒経験が限定され家族外のソシアビリテが衰退する過程と言える。子どもに注目すれば、「子ども時代」という認識が生れ、親は自分の子どもだけに愛情を感じるという情緒規則が形成される過程である。このような認識、情緒規則が突然生じたわけではない。西ヨーロッパでは、中世社会か

ら二つの大きな変化を経て近代社会に至るモデルが妥当する。一つの変化は、16―17世紀から生じた変化であり、もう一つは18世紀から始まる変化である。この二つの変化にはさまれた時期を、社会史学では、「原近代（プロト近代）」と呼んでいる。

16―17世紀には、家族と学校という二つの場所で子どもに対する態度の変化が生じ、「子ども時代」という概念が強く意識されるようになる。まず、家族内では、かわいがりの感覚が発生する。「幼児のしぐさや、かれらを可愛がる事で受ける喜びを認めることは、もはやためらわれる事ではない」。自分の子どもをかわいいと感じる情緒規則の発生がみてとれる。一方、子どもをみるもう一つの感覚が家族の外で生じる。子どもは無垢で弱い存在であり、子どもを保護し教育ししつけるのは大人の義務という感覚である。最初はこのような感覚は、聖職者や法律家、モラリスト達に共有されていただけであるが、この人々が、子どもを社会生活から隔離する「学校化」を推進したのである。原近代期は、家族内外で二つの感覚が普及していく過程である。感覚の内容は異なっているが、「子ども期」という概念が成立している所に、中世社会との決定的な断絶を意味する。階層的には、当時の上層階級であるブルジョワジーを中心に進行する。

我々が理解できる子どもに対する情緒規則は、18世紀ブルジョワジー社会に、初めて見出す事ができる。そこに、16、7世紀に出現した子どもに対する二つの感覚が結合した姿が見てとれる。家族外の教育界に出現した感覚が、家族の世界に浸透する。モラリスト達が書く多くの啓蒙書、聖職者の発言などにより、親にとって子どもは単にかわいがりの対象としてだけでなく、教育（しつけ、知育など）の対象とであるとの意識が広まる。19世紀イギリスブルジョワ社会で起った、子どものしつけを乳母や召使から母親の手に取りもどそうとする運動も、子どもの教育者としての親という意識が生じてきた証拠である。また、ルソーの『エミール』に見られる

ように、教育者の中に親代りとしての愛情に基づく責任感が生じる。

5、近代における子どもの情緒パターン

19世紀ブルジョワ社会に成立した子どもをめぐる情緒的環境は、近代社会の典型として、他の階級、周辺の地域へと広がっていった。ここで、近代社会における情緒パターンを、マーク・ポスターの『批判的家族理論(CRITICAL THEORY OF THE FAMILY)』に従って整理してみよう。

第一の特徴は、(学校に入学までの)子どもの情緒経験が、小家族に限定されるという点である。産業化による職業領域と家族領域の分離が始まる。家族は、家事や子育て、情緒経験の場とされ、家族や近所の人が一緒に働いたり生活したりする事がなくなる。子どもの日常生活において情緒的に係わるのは、親と少数の兄弟のみとなる。この環境は、子どもの情緒生活において重要な結果を生む。子どもが愛情を感じる事ができる対象、及び、子どもが権威を感じる対象は共に両親(特に家族生活の担い手である母親)しかいない。子どもにとって両親は、逃れる事のできない、絶対的な存在となる。前号で述べたように、前近代社会では、子どもに情緒的に係わる大人が大勢いた。親は絶対的な存在ではなかった。

第二の特徴は、親のしつけ方法の変化である。前近代社会におけるしつけは、単純明快に、体罰が中心になっていた。慣習を破るような行為には、物理的傷みが加えられる。一方、近代社会においては、「精神的な罰」がしつけの中心になる。子どもにとって親の「愛」は必要不可欠の存在である。親が子どもを無視するだけで、子どもは情緒経験の場を失ってしまう。道徳を破るような行為に対しては、親は「こんな事をするともう愛しませんよ」というように、「愛」を武器にして、子どもに精神的傷みを加える。当時のブルジョワ社会が性的抑圧を重んじる道徳を持っていた事を思い起してみよう。厳しいトイレット・トレーニングや性的悪戯(性器いじりなど)の禁止が、しつけとして行われた。

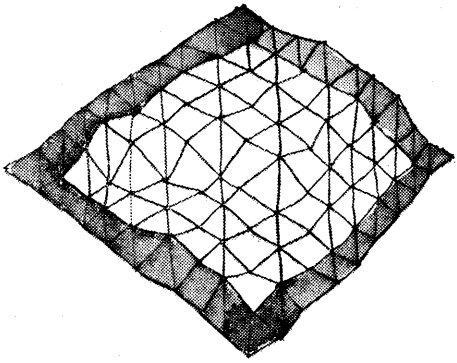
このような情緒環境は、子どもにとって精神的負担となる事は明らかだ。排便感覚や性器いじりには肉体的快感が伴う。子どもは、両親の愛情をつなぎとめるために、肉体的快感を断念する。これは、一種のダブル・バインド状況だ。子どもにとって両親は、自分を（愛情をもって）世話してくれる存在であると同時に、自然な欲求を抑圧する存在でもある。「愛しているから叱る」という行動の情緒的意味を理解する事は、非常に難しい。子どもは、まず、親との関係をめぐって複雑な情緒環境を生まなければならない。そして、前近代社会と違い、親から逃れる事はできない。

近代社会は、教育の中核として義務教育制度を発達させている。子どもは、一定の年齢になると学校に入学する。学校における教師・子ども関係は、近代家族にかける親子関係のコピーといえる。教師は、少なくとも一定時間は、子どもにとって絶対的存在となる。教育される事は、多くの子どもにとって楽しい経験ではない。さらに、教育行動は教師の愛情から行われるという意味付与がなされるため、子どもは教師に対してアンビバレントな情緒を抱く。

以上、見てきたとおり、近代社会における子どもは、両親という限定された関係の中で（愛情、権威両方含んだ）情緒を経験し、長じては、教師が加わる。子どもにとってつらい体験も、「愛情から出た行為」という意味付与が錦の御旗となり、耐える事を強いられる。つらさを親や教師に直接ぶつけるわけにはいかない。「愛情から出た」と意味付与されているからだ。だからといって、情緒的に他の人の所へ逃れる事もできない。子どもにとっての情緒経験の場は、家族しかないからだ。子どもは、つらさ、怒りなどのフラストレーションの感情を内面に抑圧する。「子どもへの愛情」が社会的に確立したために、かえって子どもの情緒的負担が増すという状況が見てとれる。

6、近代社会における「愛」の強制

近代社会における情緒的負担が重くなったのは、子ど



もだけではない。親・教師の側の情緒的緊張も増大する。前号で述べたとおり、愛情という情緒経験が生じるのは、内面で情緒規則が作用しているからである。近代社会では、親（教師）は自分の子どもに愛情を感じるという情緒規則が内面化されてきた。親は、自分の子どもをみると（内面化している情緒規則を意識することなく）愛情を感じる。正確に言えば、愛情を感じる場合もある。近代社会では同時に、親が子どもに対して行なう行動に対し、「愛情から出た行動」という意味付与を行なう。

以上のような「親は子どもをみて愛情を感じ、子どもに対する行動に愛情を込める」というメカニズムが、近代社会の理想とされてきた。しかし、現実には、親が子どもに感じる情緒経験と子どもに向かって行なう行動への意味付与は必ずしも一致しない。問題になるのは、愛情を感じないのにも拘わらず、子どもに対する行動を「愛情がこもっている」と意味付与するケースだ。世間一般は、親や教師は子どもに愛情を感じ、その行動には

愛情がこもっている事を当然と思っている。子どもを扱う当の親や教師にとっては、愛情を感じる事が社会的圧力となってのしかかる。社会的圧力が心理的なものにとどまらず、現実のものになったケースもある。20世紀初頭のアメリカでは、子どもを放っている親から「愛情がない」という理由で子どもを取り上げ施設に入れるという法的措置がとられた。以上の例は極端にしても、近代社会における親（教師）は、子どもに愛情を感じる事を心理的に強制される。しかし、四六時中愛情を感じているわけにいくまい。親にしろ教師にしろ、いやだから叱る、嫌いだからなぐる事は、普通誰だってある。しかし、愛情を感じるのが当然という規範があるため、いやとか嫌いとかの本来の感情を抑圧し、愛情からでた行為という意味付与を行なう必要がある。この事は親、教師にとって精神的負担となる。

このような親及び教師の情緒的態度は、子どもを情緒的に混乱させる。親の本当の感情と親の行動に付与した意味（言説）が分離する。子どもは、「愛していると言葉では言っているけれども本当は怒っている」と感じる。これは、ダブル・バインドに他ならない。前節で、子どもにとって親は、愛情の対象であると同時に恐怖の対象であると述べた。それゆえ、近代社会においては、子どもは二重のダブル・バインド状況に置かれる。ベイトソンは、情緒障害の子を研究してダブル・バインドを発見した。しかし、近代社会においては、すべての子どもが多少なりともダブル・バインド状況に置かれている。

次回には、近代的情緒パターンが形成された原因と、家族危機と言われる現代社会における状況を考察する。

（東京学芸大学助手）